

いとしまをかけてとぶとはまてやとりおにもはねにもことづたへせむ

〔大内家壁書〕從山口於御分國中行程日數事○中略

筑前國 怡土郡七日、請文十九日○中略

寛正二年六月廿九日

備中守 奉 秀明○下略

志摩郡

〔筑前國續風土記 二十一〕志摩郡

續日本紀元明天皇和銅二年、筑前國島の郡の少領に姓を給りし事あり、是此郡の事、國史に見えし始なり、また萬葉集の十五卷にも、筑前國志摩郡の翰泊とかけり、三代實錄卷二、貞觀元年正月、太宰府言、筑前志摩郡兵庫鼓自鳴と云々、この郡を志摩と名附し事、むかしは今津のまへ、衰魔山の後の入海西へ通り、桑見元岡の前より前原にいたり、此間皆海にして、西北の諸村諸山みな海中にありしゆへ志摩とは名附けり、志摩とは、島の字をわかちて二字にかけるなり、百年以前入海漸田となりて、島にありし西北の諸村、今はみな陸地につらなれり、近年まで東西のはしは猶かたのこりしが、是又近年すでに新田となれり、むかしの入海より向ひに泊村あり、是むかしの海の入江にて、舟の泊りし所にして、唐船をもこゝにつなげりと云、田の字にも浦の字の付たる名多し、亦南に浦志村あり、是又海邊にありしゆへに名付しならん、此入海なりし所の田のそこをかへせば、今もかき蛤のがら多し、陵谷變遷の理、古今そのためしすくなからず、昔の海なりし筋よりこなたにも、亦志摩郡の内、青木、如原、谷村、今宿、田尻、太郎丸、板持、高田、志登、池田、波多、江洞、浦志前原等諸村あり、すべて中通と云、此諸村はみなむかしの入海より東南にありて、怡土郡の方につらなり、島のかたにはつゝかざれど、入海のほとりに近ければ、志摩郡に屬しけるにや、また此諸村、むかしは怡土郡なりしを、後に亂世の時、みだりに領地をわかちとりて、志摩に屬しけるにや、されば延喜式神名帳に、志登神社を怡土郡とかきしも、志登村はむかしの入海より南にあ